

Bhāsarvajña の推理論における avinābhāva

小 野 卓 也

Bhāsarvajña (ca. 950A. D., カシミール) は Nyayabhūṣaṇa (=NBhūṣ) 推理章 (anumāna-pariccheda) において、恣意や想定を離れた (NBhūṣ227.7-8, 14-15) 本質的な (svabhāvatāḥ) 不可離関係 (avinābhāva, 以下 avbh) を推理の中心とみなす。この「本質的」であることの認識論的・存在論的意味を考察する。

遍充把握論：Bhāsarvajña は、avbh は視覚器官によって最初であっても把握され、繰り返し観察するのは各人の潜在印象をはっきりさせるためであるという見解(初回把握説)をとり (NBhūṣ218. 19-21, 219.5-7 Cf. NMukt190.8-9), さらに「およそ煙は火に遍充されている。煙であるから、すでに知覚された煙のように」という推理に基づく**総括** (sarva-upasaṃhāra) によって関係が未見の対象にも及ぶことを知る (NBhūṣ 219.29-220.2) と補足する。一方初回把握説が納得できない者に対しては、普遍 (sāmānya) を対象として総括を行う意知覚が avbh を把握するという見解 (意知覚把握説) を提示する (NBhūṣ 220.5-19¹⁾)。Vyomaśiva, Trilocana, Vācaspati は繰り返し把握説を採用する²⁾ が、初回把握説を紹介する者はなく、Bhāsarvajña の初回把握説が同時代のニヤーヤ・ヴァイシェーシカ両学派に特異な見解であったことをうかがわせる。なお、後代に繰り返し把握説の根拠となった付加条件 (upādhi) の非存在の確認という側面は全く触れられていない。

この説にはいくつかの問題がある。①遍充関係が何度かの試験的な段階を経ずに最初の肯定的随伴・否定的随伴を知覚した時点で逸脱なく正しく把握されるには、普遍間の関係である avbh が、どちらが遍充するものでどちらが遍充されるものであるかという遍充関係の方向性も含めて予定調和的に外界に正しく定まったかたちで存在していなければならないという存在論的根拠が求められる問題。②肯定的随伴 (anvaya) と否定的随伴 (vyatireka) の両方を見ること (最初の 2 回) が必要なか、それとも肯定的随伴だけ (最初の 1 回) でよいのかという把握回数の問題。この点について Bhāsarvajña は「最初」の観察としながらも「火のある場所・火のない場所」の 2 つの事例を掲げており、また avbh を結ぶ関係項の数を 3 つ以

上に設定するなど曖昧である。③総括の内容が不明瞭であるという問題。Bhāsarvajña は総括は推理に基づくとしておきながら、一方で総括は意知覚によるとしており (NBhūṣ 220.13-14)、この二通りの説明に妥協点は見出されない³⁾。意知覚把握説は初回把握説が納得できない者に対しての次善の説明方法に位置付けられ、初回把握説と単純に平行に考えることはできない。意知覚に関しては Jayanta, Trilocana, Vācaspati が紹介していることから⁴⁾、ニヤーヤ学派において初回把握説とは一線を画する遍充把握論の伝統に属するものであったと考えられる。④総括が推理に基づくということは、推理が推理に基づくという無限遡及を招き、推理の一般則を議論する文脈では不適切なのではないかという問題。これらの問題については NBhūṣ 全体と他の著作から再考する必要がある。

可能性または能力：Bhāsarvajña は、avbh の関係項となる所証 (sādhya) と証因 (sādhana) に可能性 (yogyatā) および能力 (sāmarthyā) を付与し、これらを avbh に帰すると共に avbh 自体にも能力を付与している。まず所証は推理が行われる前の時点では主題 (pakṣa) を限定する可能性をもっているとする (NBhūṣ 214.26)。そしてこの可能性は「(主題における) 所証とその否定の非認識」あるいは「証因との結合関係」と換言され (NBhūṣ 214.26, NBhūṣ 214.27-30⁵⁾)、後者からこれが avbh そのものであるということになる。すなわち推理以前の所証が主題を限定するという仮定と、推理後の確定を逸脱なく直結させる役割を果たすのが可能性 = avbh であるということになる。また証因の能力は「遍充関係の把握に補助された主題所属性の把握」と説明される (NBhūṣ 221.23-24)。すなわち可能性によって仮に所証に限定されていた主題に対し、ある定まった所証の存在を決定的にすることである。ここでは avbh が補助者として所証を導出する役割を担っている。そして avbh 自体の能力は唯一性であるとする。avbh は普遍と同じように特殊を離れて唯一のものである (NBhūṣ 219.14-18)。この唯一性については、肯定的なものと否定的なものという avbh の表裏に過ぎず、全部の個物に対して同一に随伴するものであるというようにも説明される (NBhūṣ 228.24-30)。Bhāsarvajña は avbh のこのような唯一性を能力と呼び、新得の主題にも avbh が適用されることの根拠となるとしている (NBhūṣ 219.24-25⁶⁾)。

以上のような可能性・能力は未見のものに対して既見のものを適用させるという点で共通している。可能性や能力は Dharmakīrti, Kumāriḷa が多用しているが、推理の文脈においてこのような意味合いで用いることはなく、明確な影響関係を見て取ることはできない。可能性や能力を用いて推理を説明するという手法は、

同時代のニヤーヤ・ヴァイシェーシカ両学派のいずれの思想家においても見出されず特異的である。「本質的」な avbh が外界に実在するものであるという方向を強く押し進める上で可能性や能力が重要になっており、遍充把握論の①の問題に1つの解答を示していると考えられるが、その内容において「関係」「唯一性」というような存在論レベルと「非認識」「把握」というような認識論レベルの混同がある点で問題が残る。

結論：いくつかの再検討すべき問題が残るが、Bhāsarvajña は avbh に依拠して以下のような推理論を構築したと結論される。すなわち推理の根拠となる avbh は、認識者にとって最初に正しく把握されるものである。ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ両学派の定説を覆すこの初回把握説を補強するように、avbh を2つの普遍間の関係というよりも遍充関係の方向性まで予め定まった唯一のものと捉え、このような唯一性を avbh の能力と名づけて、未知のものに適用されていく根拠を与える。そして avbh に依拠して所証・証因も能力を付与され、その所証・証因に基づく推理が自動的・必然的に正しい認識手段となる。

NBhūṣ : Vārāṇasī 1968. NBhūṣ_m : Manuscript of *Nyāyabhūṣaṇa*. Microfilm of Manuscripts of Śrī Hemacandrācārya Jaina Jñāna Māṃdira Pāṭaṇa. Leheru Vakīla Jaina Jñānabhaṃḍāra. NO. 10717. NM : *Nyāyamañjarī*. Mysore 1969,1983. NMukt : *Nyāyamuktāvalī (Nyāyasārah)*. Madras 1961. NVTṬ : *Nyāyavārtikatātparyāṭikā (Nyāyadarśanam)*. Calcutta 1936,1944. Repr. Kyoto 1982. RK : *Ratnakirtinibandhāvaliḥ*. Varanasi 1983. (2nd ed.). Vyo : *Vyomavātī*. Varanasi 1983,1984

- 1) NBhūṣ 220.8 : -*dhūmavyakti*-を NBhūṣ_m 102.11 に従って -*dhūmāgnyādivyakti*-と読む。
 2) Vyo II 155.16-17, RK 106.22f, NVTṬ 140.11-12. 3) E. PRETS “Die Erkenntnis des Logischen Nexus bei Bhāsarvajña” (XXIII. *Deutscher Orientalistentag*. Ausgewählte Vorträge. Stuttgart 1989) 409.7ff では両者を同一視している。4) NM I 319.6, 322.2-3 / RK 106.22-23 / NVTṬ 140.7-8. 5) NBhūṣ 214.27 : *hy anādy-*を NBhūṣ_m 99.5 に従って *dahanādy-*と読む。6) NBhūṣ 219.24 : *yad ekatrāpy* を NBhūṣ_m 102.2 に従って *yenaivātrāpy* と読む。

〈キーワード〉 Bhāsarvajña, anumāna, avinābhāva

(東京大学大学院)